

カワウによる漁業被害を軽減するために

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 水産総合研究センター 公開日: 2024-06-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村上, 眞裕美 メールアドレス: 所属:
URL	https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2006641

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.





カワウによる漁業被害を軽減するために



【研究課題名】

カワウによる漁業被害防除技術の開発

【実施年度】 平成19～21年度

内水面研究部

生態系保全研究室

村上眞裕美

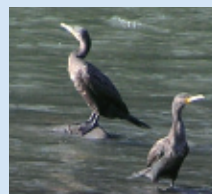


図1 カワウ

目 的

カワウ（図1）は昔から日本にいる野鳥で沿岸や川の魚を食べています。20年ほど前から急速に生息数が増えて、河川において放流稚アユが食害されるなど内水面での漁業被害が全国で広がっています。カワウは元々日本に生息する野鳥ですから、食害があるからといって根絶やしにすることは許されません。そこで、カワウを絶滅させないように気をつけながら漁業被害を軽減するような管理の方法を開発し、同時に被害を減らすために現場で行える効果的かつ効率的な対策技術の開発を目的としました。

方 法

各地の河川やコロニー、実験プールでカワウと魚の調査をして、「カワウがどのような場所で何をどれくらい食べているのか」「どのような対策技術が有効か」等を調べました。またコロニーでの繁殖生態を詳しく調べ、そこで得られた情報を組み込んだカワウの全国個体群モデルを作りました。この研究は大学や県等、13の研究機関と共同して実施しました。

結果と解析

1.カワウは様々な物理環境に適応して、魚が多い場所を察知して効率的に採食していることが分かりました。漁場における食害対策は魚の多い場所で集中的に行う必要があります。
2.カワウがアユだけを選んで食べているのではなく、環境中に優占する遊泳魚や捕食しやすい魚を好むことを明らかにしました。

3.カワウの採食行動距離が約15kmの範囲内であることを明らかにしました。

4.竹等による簡易な隠れ場所の設置によりウグイ等の隠れ場所を利用する習性のある魚種をカワウから守れることが分かりました。またカワウが通り抜けられない格子で隔てた隠れ場所には、食害を4分の1程度に抑える効果があることが分かりました（図2）。

5.ドライアイスを用いたカワウの繁殖抑制技術を開発し、300巣程度以下の規模のコロニーではほぼ完全に繁殖を抑制できる技術を確認しました。

6.カワウの全国個体群モデルを初めて開発し、駆除や追い払いがカワウ個体群に及ぼす影響を予測しました。またカワウ食害の全国ハザードマップを日本で初めて作成しました。

波及効果

開発された漁場保護技術や繁殖抑制技術は現場でのカワウ対策の効果を高めます。またカワウの全国個体群モデルは、国や県の連携で行う特定鳥獣保護管理計画において活用が期待されます。

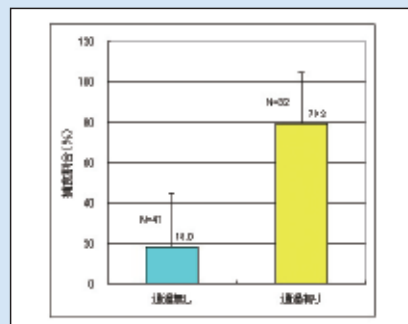


図2 格子通過の有無による捕食割合の違い 平均値と標準偏差
実験期間：2008年4月18日～10月6日、飛来確認：93日 通過無し：41日 通過有り：32日、収容尾数：10～30尾（平均13尾）